

富山の森舎

松川と繋がる森とピロティーのある舎



建物を減築し、松川と緑で繋げる
ピロティーを持つ建物を松川沿いとNHK跡地につくり、駐車場は地下に必要台数を確保する
レストランやカフェ・ショップ・会議室・文化教室・ホテル・サテライトオフィス・ワークスペースなど様々な機能が点在する



①公園の水盤・ステージの様子
水溜まりのような浅い水盤は、松川とのつながりを示すシンボル、子どもたちが賑わう
ステージ利用時は、水盤の水を抜くことで広く客席として使えるように変化する



②庁舎南側から、レストラン越しに松川方面を見た様子
レストラン棟はピロティーとなっていて、グラウンドレベルでは、植栽も松川からつながり、人がながれる
2階レストランでは、こだわりの食事と富山城の景観を提供。県庁舎とは2階レベルでつながり、ホテルの朝食会場としても利用できる

ある日 ある人 の「富山の森舎」での1日

〈働く人〉

- 8:00~ 「富山の森舎」へむかう 地下の駐車場に駐車
- 10:00~ サテライトオフィスで打ち合わせ
- 12:00~ 公園でステージからの演奏を聴きながら昼食
- 14:00~ 気分転換に公園内のワークスペースで作業
- 16:00~ 早めに退勤して、エリア内のネイルサロンへ

週末は家族も一緒に駅から路面電車に乗り、公園で開催されているマルシェへ

〈大学生〉

- 9:00~ ピロティーを通り抜けて「富山の森舎」に到着
- 10:00~ 産学連携プログラムでワークショップに参加、自然豊かな公園の中のワークスペースで、ディスカッションも盛り上がった
県庁職員の人たちが別のスペースで打合せをしている様子が見えた
- 12:00~ 友人が来店しているサンドイッチやさんで昼食
- 14:00~ カフェでレポート

明日は案内所でアルバイト

観光で訪れた人たちに富山の魅力をたくさん伝える

〈地域住民〉

- 11:00~ 市役所で用事を済ませる
- 12:00~ 公園で友人と待ち合わせしてランチ
- 14:00~ 友人と一緒に買い物・八百屋で旬の食材探し
- 17:00~ 家事を片付け、犬と散歩に公園へ
ジョギングしている人や楽器の練習をしている人、駆け回る子供たちで賑わっている

明日は最近通い始めた料理教室の日 自然の中のオープンなキッチンで料理できると気分転換になる

〈観光客〉

- 10:00~ 新幹線を降り、路面電車ですり前へ
- 10:30~ 公園の小屋のようなフロントで荷物を預ける
- 11:30~ 川に面したレストランで桜を眺めながら昼食
- 12:00~ 案内所で観光情報を聞き、ショップで名産品や工芸品を見下見
- 13:00~ 自転車を借りて街を散策
- 18:00~ 県庁のクラシカルなホテルにチェックイン
- 20:00~ 夕食のあとは公園を散歩
いい雰囲気のカフェを見つけて休憩

明日は公園のカフェでモーニング お土産も買おう

富山の森舎

●現状分析

・庁舎の正面や公園を囲むように背の高い木が並んで配置されているため、視認性はあまり良くなく、庁舎と広い公園が隣接する立地をあまり活かせていないと感じた。（写真①②参照）

また、庁舎の南側は建物が立ち並んでいることで、県庁前公園エリアから松川や富山城址公園への行き来はできず、街のつながりを分断している。（写真③参照）

・庁舎外構のほとんどが駐車場ということもあり、歴史ある庁舎をゆっくり眺められる場所がなく、用がないと県庁に近寄り難い印象を受ける。（写真④参照）

・街の中心部であることで交通機関にも恵まれ、公園や豊かな自然に囲まれた、ポテンシャルのある場所だと考える。

・人を集める仕掛けや仕組みを考える際、平日は働く人や県庁利用者などの集客者数を見込み、休日は観光客の来訪も予想できるなど、ターゲットを狙った具体的な提案もできる。

その他、周辺環境や施設の使用状況など、分析から、県庁前公園／庁舎／松川／富山城址公園を、一続きのエリアとして考えることで、気軽に立ち寄りやすくなり、富山駅→県庁→まちなか商店街地区の3つのエリアの連続性・回遊性を高め、楽しく歩いて巡ってもらえるようになることを考えた。

さらに、提案対象エリアにとどまらず、市役所や富山城址公園、周辺の観光スポット、路面電車なども巻き込んだ取り組みを行うことで、街全体を活性化していく提案内容にできると考えた。



①県庁前公園南側道路（北東方向）



②富山県庁本館入口階段から県庁前公園（北方向）



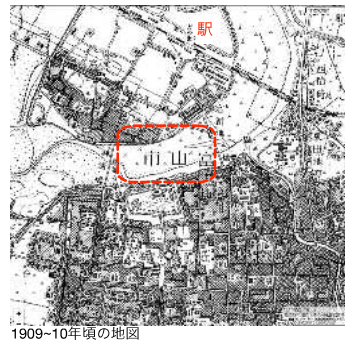
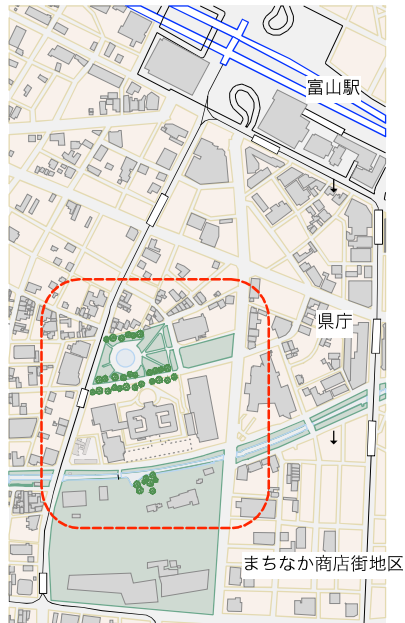
③県警本部前道路松川沿道（東方面）



④県警本部東側通路（北方向）

●テーマ

- ・今の時代に限らず、20年後、さらにその先の未来も見据えた空間づくり・まちづくり
- ・働く人、観光に来た人、用事があって来た人、用のない人（散歩）...誰にも開かれていて、気持ちよく過ごせる自然豊かな空間
- ・魅力ある施設やイベントを利用したいと思える、チャレンジできる場所
- ・エリア全体を活性化させ、持続的に文化や魅力が育っていく環境を作る



1909~10年頃の地図



1935年竣工当時

・昔の地図より、庁舎のあるエリアには元々は川が流れており、1935年の3代目の庁舎の竣工写真からもわかるように、建物はひしめき合っていないのどかな風景だった。

将来に繋げる環境を思う時、建設当初の風景から着想を得て、県庁のあるエリア一体を広い緑地として再整備し、自然豊かな森の中にある庁舎やテナント、広場や憩いの場所として人々に長く使い続けて育ててもらえる空間を目指したいと考えました。庁舎が建った当初のイメージに立ち戻り、増築を繰り返した歴史とは違ったものとなるように、この先の育つ未来へと繋げたいと考えます。

●コンセプト

- ・南館／東館を撤去し、地下駐車場にまとめ、地表面には木々をたくさん植えてエリア一帯の森にする
- ・新たにピロティエーを持つ建物「森舎」を建て、庁舎の間取りと合わせて様々な機能を点在させる
- ・森の中には、水溜まりの水盤やステージ、庁舎テラスや小屋を設けて、様々に変化する景色を用意
- ・庁舎の歴史を体感できるように、庁舎の1フロアをホテルの一部として利用する（開かれた行政）



富山の森舎

●提案

森のような自然豊かな空間で、働く人・来訪者・地域住民など、さまざまな立場の人が入り混じって過ごせる居場所をたくさんをつくることを考えました。

機能を固めず、森の中に点在することで、自然と人が交流できる賑わいのある場所となることをイメージしています。

▶公園

明るく開かれた森は、風通しよく憩いの場となる。さらに、イベントの開催や各施設と連携した活用が見込める。

▶ステージ

音楽イベントや、発表会など様々な場面で活用。人が集まる場所。

▶水盤

豊かな松川の水資源を表現する水盤。水溜まりのように現れたり、引いたりする。水遊びの場所となったり、イベント時には水を抜いて客席のエリアになる。雨水を貯めて貯水再利用を行う。

▶駅

路面電車の駅を公園側に移動させ、森の木陰とベンチが駅の待合所の役割も担う。

◎視認性

視界を遮る壁のように植っていた木々を敷地内に分散させることで視界が抜け、森と庁舎とのつながりがうまれる。

▶ホテル

本館の空き階を利用したクラシカルなホテル。文化財を身近なものにし、この場所ならではの貴重な体験ができる。未来へ受け継ぐひとつの形として将来的には、一棟全てホテルとしての利用も視野に。

▶レストラン

桜並木と松川に面しているため、富山の素晴らしい景色を眺めながら食事できる。1階はピロティとし、松川に人が自由に歩き来でき、風も視線も光も気持ちよく通り抜けるようになっている。まちなか商店街地区との繋がりがうまれる。



▶駐車場

森舎の地下を利用した駐車場。建物の脇から地下におりると駐車場が広がっている。

▶拠点となる建物「森舎」

駅からアクセスしやすい目立つ場所に建つ。案内所・飲食店・テナント・ワークスペースなどに活用し、ホテルや行政の機能も点在させる。ピロティや吹き抜けることで、森と舎はつながる。富山木材を活用して建物をつくり、育てる。エネルギーは自然エネルギーを活用し、防災・減災の拠点となる。

◎外構計画

公園と庁舎の間の道路を無くし、敷地エリア全体をシームレスにつなぎ、一体となる緑。自然豊かな富山の森の中に、歴史ある県庁舎やこれからの森と舎が建ち、人が森の中で過ごすイメージ。

◎余力

建物にはテナントをたくさん誘致するのではなく、レンタルスペースや公園の広場などを活用して市役所と連携した取り組みを行うことで、地域住民にとっての親しみのある場所を目指す。

▶小さなテナント

森舎から分散した小屋のようなテナントを敷地内に点在させる。

お店や習い事の教室、ワークスペースに利用でき、経済活動の場・雇用の場・チャレンジの場として産学官民連携や、県内外からの多様なプレイヤーが集まるきっかけとなる。

◎つながり・回遊性

通りぬけしやすく、視界も抜けることで松川や富山城址公園、さらに周辺の観光地との体感的・心理的なつながりができる。行き止まりがなく回遊できるイメージ。



③公園から庁舎を見た様子

クラシカルな庁舎の魅力を最大限引き出す構成。庁舎をゆっくり眺められるテラス。



④庁舎と公園の間の様子

左に庁舎、右に森舎をみる。森舎はピロティになっていて、森と繋がっている。



⑤庁舎前で夜にイベントを開催する様子

庁舎テラスでのイベントイメージ。クラシカルなイベントが似合う。